# ナシ樹体ジョイント仕立ての普及

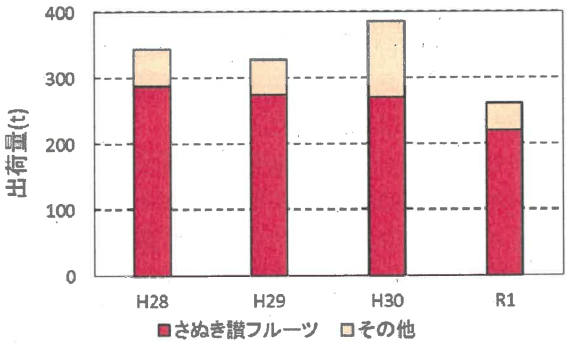
■　豊南地区梨部会　■

（西讃農業改良普及センター　伊賀悠人）

## ●対象の概要

豊南地区梨部会は観音寺市豊浜町にある県内唯一のナシ産地で生産者43名が約30haを栽培している。

同町のナシ栽培は明治42年から始まり、2019年で110周年を迎え、「ホウナンの梨」として県内外から高い評価を得ている。特に主力品種である「幸水」と「豊水」の糖度12.0以上の果実は、県が推奨する「さぬき讃フルーツ」として出荷され、同部会の高品質ブランド商材となっている。




図－１「ホウナンの梨」の出荷量

## ●課題を取り上げた理由

これまで同部会では、標準木の生育調査や生産者相互による園地巡回、シンクイムシなどのトラップの設置による適正防除の徹底等により、高品質安定生産に努めてきた。

しかし、樹の老朽化や生産者の高齢化により、生産性や品質の低下が散見されるようになった。

このような中で、早期成園化が可能で作業性向上が期待できるニホンナシの樹体ジョイント仕立て法（以下「ジョイント仕立て」と言う。）が神奈川県農業技術センターで開発され、この技術を導入することとした。改植や規模拡大を図る上でジョイント仕立ては有効であり、ＪＡと連携しながら推進することとなり、併せて当産地での適応性や管理ポイントについても調査・検討することとした。

## ●普及活動の経過

１　部会での普及啓発

ジョイント仕立て導入のメリットを説明し、取組み意欲の醸成を図った結果、部会内の生産部メンバーが中心となって試験導入を行うことになった。

**「ジョイント仕立て」のメリット**

- ○苗木の定植から収穫開始までの期間が短い。
- ○着果部位が同一方向であるため、作業の省力化に優れる。
- ○枝先端と基部の生育が均一となりやすく、果実品質が安定しやすい。

２　特許実施の許諾契約の締結

ジョイント仕立ては、神奈川県が特許を取得しており、部会やＪＡと協議した結果、ＪＡ香川県が契約を締結することとなり、平成28年から栽培を開始した。

３　大苗育苗用のほ場を整備

ジョイント仕立てを行うためには、１年間の育苗で3.3m以上の大苗を作ることが重要で、そのためには定期的なかん水や摘芯、ジベレリン処理などの管理が必要である。

コストと労力を考えた結果、生産部役員の農地を借り上げ育苗ほを整備することとした。育苗管理は栽培予定者が自ら行うこととし、今後も栽培希望者の育苗ほとして提供することとしている。また、部会の講習会や巡回の後に生産者を集めて育苗の管理について指導の徹底を図った。

ジョイント仕立て用大苗育苗ほ

4　ジョイント仕立ての指導等の徹底

毎月の部会や講習会の際にジョイント仕立て樹の生育調査、育苗、接ぎ木等の栽培管理についての指導を実施した。

樹体ジョイント部分の様子

## ●普及活動の成果

1　ジョイント仕立て栽培面積の拡大

ジョイント仕立ては、平成28年度から栽培が始まり令和元年には60a（４名）となり（表１）、元年から収穫が始まった。

また、早期成園化を目の当たりにした部会員にはジョイント仕立てによる改植に対する関心が高まっており、次年度にはさらに「幸水」10a、「あきづき」5a、「凛夏」5aの改植を予定している。

表－１ジョイント仕立て取組みの推移

| | H. 28 | H. 29 | H. 30 | R. 1 |
|---|---|---|---|---|
| 栽培面積(a) | 5 | 35 | 50 | 60 |
| 生産者数(人) | 2 | 4 | 4 | 4 |

2　失敗しない栽培のポイント

ジョイント仕立ての栽培マニュアルはあるが、実践した中での失敗事例も見られたことから、次の３点を重要ポイントとして指導を行った。

1）ジョイント仕立ては、ジョイント２年目から着果させることは可能であるが、主枝の充実や樹冠の拡大を図るため、３年目から着果させる。

2）大苗育苗で目標長に達してない場合、無理してジョイントしてもうまく生育しないため、もう１年しっかり育苗する。

3）主枝先端の管理として、基部側より先端側が下がると樹勢が低下するため、必ず先端側は水平よりも高く保つ。

この他の栽培管理ポイントなども「失敗しない栽培ポイント」としてとりまとめ、部会員と情報共有を図った。

## ●今後の普及活動の課題

1　ジョイント仕立て技術の確立

ジョイント仕立ての栽培マニュアルは公開されているが、本県の気象に対応した細やかなマニュアルは作成されていない。

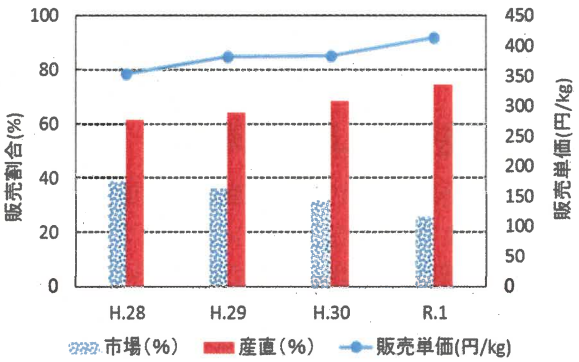
当産地においても来年産から本格的に着果を開始するため、慣行栽培との収量や果実品質、作業性の違いについて調査し、蓄積したデータに基づく産地オリジナルの栽培管理マニュアルの作成に取り組む。

2　生産量の高位安定化

「ホウナンの梨」は県内外から高い評価を得ており、特に県内需要が年々高まっている。

このような中、平成28年から、地場消費（産直）に重点を置いた販売に舵をとった。その結果、販売単価の向上や輸送経費の削減により、生産者の収益性は向上した。

しかし、依然として生産量や品質は安定していないため、高品質安定生産を実現するためにもジョイント仕立ての導入を進めて園の若返り早期成園化を図っていく必要がある。




図－２　販売単価・割合の推移

3　新品種におけるジョイント仕立ての確立

当産地において、成熟期が「幸水」と「豊水」の中間くらいであり、両品種の端境期を埋めるリレー品種としても期待できる品種「凛夏」の導入を推進しており、この「凛夏」でのジョイント仕立てについても検証することとしている。

また、近年、西南暖地を中心に「ねむり症」（秋季の高温の影響等による発芽不良）が問題となっているが、「凛夏」は秋季が高温で推移した翌年においても発芽が安定し、大玉で食味も良好であるため、ジョイント仕立ての適応性の検証が急がれる。